

バイロンの黙示録的崇高

—— 千年王国思想の視点から ——*

門 田 守

I

黙示録に現れた千年王国思想⁽¹⁾とは墮落した秩序の破壊であり、かつ理想的社会“New Jerusalem”の建設である。キリストによる悪魔の千年に及ぶ捕縛、悪魔の一時的蘇りと地獄への放逐、そして神の御座の降下と最後の審判へと至る壮大な黙示録的論理⁽²⁾は Lord Byron の詩作品に大きく影響している。しかもそこに18世紀崇高美学の思想史の流れ⁽³⁾を加えて見ることによって、彼の詩学のある特徴的な面が浮かび上がってくるように思われる。それは天上のエデン的空間に憧れるユートピストから地上の解放された国の建設を目指すミレナリアンへと向かう動きである。⁽⁴⁾

Burkeによれば、崇高とは例えば巨大な事物に面した時の精神の空白状態であった。⁽⁵⁾ またそれは Shaftesbury、Addison、Dennis といった18世紀崇高美学の標榜者たちに従えば、無限空間への宗教的思慕の現れでもあった。⁽⁶⁾ そこでバイロンにおける黙示録的崇高が、彼の詩において無限空間の彼方に静かな宗教的空間を設定する18世紀崇高美学の構造を破碎し、そこに天上の神の御国を地上に引き摺り降ろして実現しようとする千年王国思想のモメントを与えていることについて考察したい。さらにその千年王国思想が彼のギリシア遠征にまで影響を与えていることにも言及したい。扱う主な作品は *Sardanapalus* (1821)、*Heaven and Earth* (1823)、*Marino Faliero* (1821)、*Prophecy of Dante* (1821) である。

II

18世紀的崇高は無限空間あるいは人間の力を越えた天の領域と有限かつ卑小な地上の間に発生する絶対的な隔たりの意識にその基礎を置いていた。前者は壮大な山脈や海洋を介して永遠の神の領域へと捧げられ、後者はいずれは崩れ去らねばならないこの世の領域を代表していた。人間が神の巨大な力や偉大さに対峙する時に感じる距離感が崇高の感情を起こさせるのである。バイロンはこの崇高における18世紀的対立の心理を『サーダナパラス』の中で明らかにしているのである。

古代 Assyria 王朝最後の王であるサーダナパラスは、最高の贅沢と欲望に満ちた生活を送っていた。しかし表面的には穏やかで豪華な王宮は、地方領事の Arbaces と僧侶の Beleses の陰謀により奪取される寸前である。帝国は倒壊の危機に晒された終末的状况にあり、物語は黙示録的極限状况で始まるのだ。

しかも、この怠惰な王は本来の自己を実現していない。彼は女性のように装い、化粧を施し、決して宮殿から外に出ない王である。⁽⁷⁾ 囲われた子宮空間に閉じ込められた王は、“he may redeem / His sloth and shame, by only being that / Which he should be, . . .” (I. i. 18-20)⁽⁸⁾ と語られるように、本来の秩序の頂点としての男性的王として君臨すれば、帝国を立ち直らせることができるかもしれない。しかし、それは実は墮落への道でもあるのだ。何故なら本来の王となることは社会的な要請であり、権力による支配と新たな流血しか結果しないからだ。

サーダナパラスの弟であり、男性的秩序と戦闘を愛し、帝国にとっては理想的臣下である Salemenes は王に力で統治するように申し出る。しかし王は国民たちが “they murmur / Because I have not shed their blood, nor led them / To dry into the desert's dust by myriads” (I. ii. 226-28) や “If then they hate me, 'tis because I hate not: / If they rebel, 'tis because I oppress not” (I. ii. 412-13) といった状態に至る可能性を否定し、頑強に支配することを拒絶する。王は権力と制度によって国を治めることは一つの墮落であるとみなしているのだ。彼にとって理想的な王国とはこの世のものではない、神の聖なる楽園のよ

うでさえある。彼の地上の王国に対する懐疑的姿勢は “If they should sweep me off from Earth and Empire, / Why, what is Earth or Empire of the Earth?”

(I. ii. 398-99) という発言に明瞭に認められる。また彼は “Till now, no drop from an Assyrian vein / Hath flowed for me” (I. ii. 408-9) と断言し、樂園を汚す暴力や流血を容認しない。言い換えると、これは人類の墮落以前の争いのない、無垢な黄金時代への帰還の願望なのである。⁽⁹⁾

しかしながら、バイロンの樂園願望はギリシア・ローマ的な黄金時代からキリスト教的な天上の樂園へと進化しているようだ。⁽¹⁰⁾ 何故なら彼の諸々の作品ではメシアが要請され、千年王国的要素が頻繁に導入されることになるのだから。『サーダナパラス』においても主人公は “It [the evening banquet] seems unto the stars which are above us / Itself an opposite star” (I. ii. 557-58) と述べ、彼の愛妾 Myrrha との宴を天の星々の一つに譬え、天上への憧れを明かにしている。だが、所詮宴は閉ざされた空間でしかない。陰謀が渦巻く中、王は逸楽のホールで “Here sorrow cannot reach” (III. i. 3) と叫び、閉鎖的空間へと逃避する。彼はかたくなに内側の閉鎖的ユートピア空間を守ろうとするばかりだ。しかも宮殿の外は崇高な雷鳴が轟く、嵐の天候であり、王の内側に籠る退行性を強調する設定になっているのである。

天上の樂園への憧れはさらにミラによって明瞭に語られている。王国滅亡のまさに黙示録的な日の朝、彼女は

The day at last has broken. What a night
Hath ushered it ! How beautiful in heaven !
Though varied with a transitory storm,
More beautiful in that variety !
How hideous upon earth ! (V. i. 1-5)

と天の美と地の醜を対立させた後、朝の空の美しさが “dwells upon the soul, and soothes the soul, / And blends itself into the soul” (V. i. 19-20) すると述べ、天の崇高な風景に精神的な慰めを見出しているのである。夜が明けるこ

とは語源的にまさに地上最後の日の「帳が開けること」(“revelation”)であるし、そのまま黙示録の状況の導入なのである。

ここでの天上の美と地上の醜の対立は、精神的に18世紀の美学に棹さしている。現世の苦しみから無限空間として措定された神の領域に救いを求める態度は、風景意識としては18世紀崇高美学に依拠していたと思われる。この保守的風景意識は、例えば Radcliffe のそれと非常に似通っているのだから。彼女の *The Mysteries of Udolpho* (1794) では “when viewing the sublimity of nature, and her mind recovered its strength” (242)⁽¹¹⁾ と見えるように、監禁状態の Emily は自然の崇高なる風景に精神的依り所を見出しているのである。また同様に *The Italian* (1797) では Schedoni から逃亡中の Ellena は “the mountains themselves display a sublimity, that seems to belong to a higher world” (162)⁽¹²⁾ と述べ、崇高なるアルプスの山並に天上の雰囲気を感じ取っているのである。いずれも天上への超越と地上の卑小さの二元論的意識が風景に投影された例である。

『サーダナパラス』において黙示録の崇高は、物語の最後でその切迫感の最高潮に達する。王とミラは反乱軍を前にして宮殿中の財宝を盛り上げさせて山を築き、その上に火を放ち、自らの軀を焼くという崇高なる死を遂げる。天は彼らに味方しない。折から大洪水が起り、Tigris 河の氾濫によって宮殿の城壁が崩壊してしまう。そこでチグリス河が反抗しない限りアッシリアの王朝は無事であるという予言による保障は成り立たなくなるのである。そこで王は己の遺体の灰が “borne abroad upon / The winds of heaven, and scattered into air” (V. i. 477-78) と天空へと運ばれることを願い、ミラは “loveliest spot of earth” (V. i. 488) としての地上楽園たる宮殿に別れを告げて、両者共に天への憧れを明確にするのである。⁽¹³⁾ この作品のテーマは、黙示録的崇高の状況を導入することによって天上の楽園への願望を描くことであつたのである。

『サーダナパラス』と同様に天への憧れを描いたものに、その名も『天と地』という壮大な天上と地上の交流を扱った作品がある。これは天使たちと人間の女たちとの愛の不可能性をテーマとしている。Anah と Aholibamah はそれぞれ Azazel と Samiasa という天使たちに恋をする。しかし彼らの間の恋愛

は許されない。彼らの関係を切るように働く者たちとして、地上の側にはアナの恋人 Japhet、天上の側には大天使 Raphael が配されている。だが彼らの説得にも拘らず、人間と天使の交流は継続していく。

女たちの天への憧れは潰れ去る運命にある。ラファエルは掟に背いて人間の女を愛した天使たちに “Then from this hour, / Shorn as ye are of all celestial power, / And aliens from your God” (I. iii. 720-22) と告げ、彼らを天から追放してしまう。怒りに燃えた神は黙示録的な災害⁽¹⁴⁾である大洪水を起こし、天使たちはそれぞれ相手の女を連れて地の果てへと飛び去って行く。彼ら二組は天からも地からも隔絶された存在のようだ。何故なら天使に女を天上に運ぶ力はなく、地は岩場に立ち悲嘆にくれて箱舟の到着を待つジャフェットたちに割り当てられた領域なのだから。この結末が示しているのは天と地の交流の不可能性であり、それはそのまま18世紀的崇高の二元論的構造を支えているのではなからうか。

古典的な崇高美学に通底している思想は、神の属性を表す自然はそのまま完全であるという保守的楽観性であった。⁽¹⁵⁾例えばシャフツベリーは “The Moralists” (1709) の中で、自然の完全性への信頼を Theocles に

I sing of Nature's order in created beings, and celebrate the beauties which resolve in thee, the source and principle of all beauty and perfection. (II. 98)⁽¹⁶⁾

と語らせている。デニスの詩の原理も “the Works of Man must needs be more perfect, the more they resemble his Maker's” (I. 335)⁽¹⁷⁾ という発言に窺われるように、より神の被造物に近づけて創作することであった。自然の完全性への信念はその創造主としての神への信仰が支えているのだ。アディスンが *The Spectator* (No. 565, 1714) において星雲に思いを馳せる時、それを “the Immensity of God's Works” (IV. 280)⁽¹⁸⁾ として賛嘆せねばならなかった理由は、18世紀的崇高の宗教性に根ざしていたのである。バイロンの天空への憧れ⁽¹⁹⁾はこうした宗教的崇高の流れを継承していたのだ。この時彼の姿勢は現実から逃避し、天上のエデン的空間に回帰を願うユートピストのそれであった。ところが同時に、彼は地上に楽園建設を願うロマン派の変革のモメントも示すので

ある。ここに彼の千年王国主義的態度が姿を現し始めるのである。

III

『サーダナパラス』にしても『天と地』にしても、有限な地上に対して永遠の天が措定されていた。天は静的な理想空間であり、「良き場所」(“*eu-topos*”)と「無き場所」(“*ou-topos*”)⁽²⁰⁾の両面性をもつ、退行的なユートピア空間と呼んでよいであろう。バイロンは確かに天の楽園に憧れる、言わば上向きの視線をもっていた。だが天上への楽園願望は現実の地上を彼に楽園の残骸⁽²¹⁾として認識させたのであった。彼の詩では天と地の二元論的思考法が顕著となる。そして果して失われた楽園をもう一度地上に復興させたいという願望が彼の胸をよぎらなかったであろうか。結論的に言って、彼は楽園をこの地上に引き摺り降ろす態度も示しているのである。これは彼のユートピストからミレナリアンへの変貌と呼んでよいであろう。この千年王国思想的傾向は『マリーノ・フェリエロ』にとりわけ顕著である。

『マリーノ・フェリエロ』はかつては Venice の全権を掌握していた総督のフェリエロが、腐敗した貴族階級の手にかかって最後を遂げる悲劇である。確認しておきたいことは、既にヴェニスが凋落した楽園であることである。フェリエロが彼の妻 Angiolina の不貞を捏造して擲擄する Michel Steno を訴えても、40人会は彼に一ヶ月の禁固刑しか課さない。かつて Hungary を破り、Genoa と Rome で大使を勤め、ひたすらに祖国の自由と独立のために尽くしたフェリエロの権威は完全に失墜している。その代わりに、墜落した貴族階級の政治体制がヴェニスを覆っている。⁽²²⁾ 総督は自分の地位が“the rejected beggar” (I. ii. 6) よりも劣り、ただの奴隷に等しいものであると託つ。彼の“The blood and sweat of almost eight years” (I. ii. 121) はステーノの“The grossest insult” (I. ii. 123) よりも軽いものでしかないのだ。総督にとって“The innocent creature” (I. ii. 176) であるはずの妻が中傷されても、彼は論駁することができない。彼はもし誹謗の言葉が単なる農夫の椅子に書かれていたら、ステーノは即座に殺されていたであろうと言う。しかしそれが総

督の座に書かれていたが故に、彼は40人会の裁判で保護され、身に何の危険も受けないのだ。総督の権威は地に落ちている。かくしてファリエロは農夫以下の地位に墮し、ヴェニスは秩序が逆転された反秩序の空間と言ってよいであろう。

またもや、楽園復興のテーマが作品の基調として前景化されてくる。ファリエロは貴族階級を打倒し、自由な楽園を建設しようとする。彼は直接的には兵器庫長の Israel Bertuccio の影響を受けて、ヴェニスの人民の解放者になろうとする。彼らは以前共に祖国のために闘った同士であった。そのためファリエロは、祖国愛において彼と心理的に深く一体化する。また彼は “a happy people” (I. ii. 417) の王となるとしても、それには “If that the people shared that sovereignty” (I. ii. 419) という条件を明示する。あくまで王冠を被って闘い、ヴェニスの解放者たらんとするファリエロは未だに貴族的性格を留めており、真の民主制の認識には至っていない。⁽²³⁾ それでも革命軍とも人民軍とも共通基盤に立とうとする点で、彼は平等社会の建設を目指していると言えるであろう。⁽²⁴⁾

ファリエロの戦いは社会秩序に外部的な力を加え、その体制自体を変革してしまう千年王国的情熱に促されている。⁽²⁵⁾ これに対してサーダナバラスは受動的にエデン的なあらゆる欲求が充足された愛の楽園を夢想するユートピストだと言えるだろう。彼には社会の変革という意識はほど遠いのである。総督はかつてあったであろう過去の理想的状況を無理失理に地上に実現しようとする。彼が革命軍と共に願うことは “We will renew the times of Truth and Justice” (III. ii. 168) であり、彼を動かしている力は現在の総督のそれではなく “a man who has been great / Before he was degraded to a Doge” (III. ii. 201 -2) のものなのだ。彼は “my fame (and I had fame) — my breath — / … / My heart — my hope — my soul” (III. ii. 204 -6) という全身全霊を投げ出して、全ての秩序が急激に変革されてしまう黙示録的瞬間に己を賭ける。その結果は “I make this city / Free and immortal” (III. i. 45-46) のようにヴェニスが無遠の都市へと転化し、ファリエロが現実の総督でありつつ、自身が “what I should be” (II. i. 453) として形容する救い主となるか、あるいは全てが失

われてしまうかのいずれかなのだ。また彼は敵としての貴族階級への怒りを“is Satan saved / From wrath eternal?” (II. i. 261-62n) と述べ、革命軍の参集する目的を“To overthrow this Monster of a state” (III. ii. 165) と表現する。これは「黙示録」第12章 (Rev. 12) においてサタンあるいはドラゴンとして形容された神の敵と重ねられて、貴族階級が捉えられていることを示すのだろう。この劇は「黙示録」の最後の時間へと緊張の電荷を増していく。

ファリエロは救世主メシアとしてヴェニスに千年王国を実現しようとする。⁽²⁶⁾ 反乱の日、彼は“Now the destroying Angel hovers o'er / Venice, and pauses ere he pours the vial” (IV. ii. 133-34) というように、破壊天使の幻影を天空に見る。この姿は「黙示録」第8章の破壊天使の姿に重ねられている。終末論的状况は深まりを見せるが、その向こうには千年王国の光輝が見え隠れしている。“this day, black within the calendar, / Shall be succeeded by a bright millennium” (IV. ii. 155-56) に明瞭なように、ファリエロはこの破壊の後に千年に渡る平和な時代が来ると述べ、千年王国思想を示すとともに、メシアとしてヴェニスを治める自らの立場を表明しているのである。これは天上の宗教的空間にただ憧れるだけではない、地上に新しい楽園を建設しようとする衝動の現れであろう。

そうしてみれば、革命軍の決起の合図である聖マルコ教会の鐘の音は千年王国の到来を告げていると考えなければならない。しかし確かに鐘は鳴り響くが、貴族たちによってすぐに止められてしまう。鐘の音は千年王国の超越的意味を失い、貴族階級にとっての地上化された“The traitorous signal” (IV. ii. 247) に墮してしまうのだ。単純に考えれば、この結末は反乱分子の Bertram が元老院議員の Lioni に事前に計画を暴露していたことに起因する、革命の頓座に過ぎない。しかしその裏側には、千年王国の夢が実現の寸前に潰れてしまったという意味も含まれていたのである。

フェリエロは解放者となりきれず断頭台の露と消えるのであるが、バイロンの救世主を求める思いはなおも続く。例えばメシアは *The Morgante Maggiore* (1823) において、Orland という Charlemagne 王家の騎士の姿を取って現れる。不当な中傷によって宮廷を追われたオーランドは巨人族によって迫害され

ている修道院を救い、さらに巨人族でただ一人生き残ったモーガントをキリスト教に改宗させるからである。修道院長の Clermont の “here an angel was sent down from Heaven” (I. lxxxii. 8) という言葉に見えるように、オーランドは天から遣わされた救い主でもあったのである。しかし黙示録的崇高との関連で最も劇的にメシアが描かれているのはやはり『ダンテの予言』であろう。

これはその序文に見られるように、Troy王 Priam の予言をよくする娘 Cassandra や海神 Pontus の同じく未来を見通すことのできる息子 Nereus の予言とともに、聖書の予言書に範を取っている。つまり、これはダンテがイタリアの未来において起こる事について黙示録的な予言をする詩なのである。

予言者は故郷 Florence を追放されてイタリア各地を彷徨った末に、Ravenna で命を落とす直前のダンテである。遠く離れていても、彼は天からフロレンスを覗き込むという、上からの視点をもっている。“I would have had my Florence great and free” (I. 59) に見えるように、彼の望みは故郷を発展させて解放することであった。しかもそれは彼の目には “that Jerusalem which the Almighty He / Wept over” (I. 61-62) として映じている。千年王国的衝動が彼のフロレンス解放の願いに重ねられているのだ。そして解放されるべき自らの生地を含めたイタリア全体は彼にとっては、“Thou, Italy! so fair that Paradise, / Revived in thee, blooms forth to man restored” (II. 47-48) という言葉に窺われるように、美しき楽園に比するべき土地なのである。そのためイタリア解放は楽園復興となるのである。楽園は天上にあるものではなく、地上に降ろされているのである。

千年王国的視点はメシア待望の姿勢にも明瞭である。すなわち、

Oh! more than these illustrious far shall be
The Being--and even yet he may be born--
the mortal Saviour who shall set thee free

(III. 52-54)

とあるように、イタリアの輩出した多くの偉人たちよりも優れた救世主が生まれてくる可能性が示唆されているのである。この救い主がいかなる人物なのかは何も明示されていない。それはダンテ自身の生まれ代わりなのかかもしれない

いが、確かなことは彼が死の直前にも故国に対してメシアの再臨を望んでいることである。生と死の境目にいるダンテは“this huge gate of heaven” (IV. 56) の手前でイタリアの将来について語るが、その中にもはやメシアは現れない。Petrarch、Ariosto、Tasso という愛国者は出現しても、メシアの姿は予言の中にはない。“I may not overleap the eternal bar / Built up between us, and will die alone” (IV. 147-48) とするダンテと故国との間には和解は成立せず、彼はその地に“the evil days” (IV. 150) が打ち続くことのみ宣言する。イタリアにおける千年王国の実現は否定されたのであった。

『ダンテの予言』におけるメシアの再臨の失敗は、現実のイタリア政治改革の失敗を映した現象である。皮肉なことには、バイロンは親しい軍人の Thomas Medwin との会話で、この詩のイタリアでの受容を “It was looked at in a political light, and they [the Italians] indulged in my dream of liberty, and the resurrection of Italy” (159)⁽²⁷⁾ とする。それはイタリアの革命運動を鼓舞するものとみなされたのである。ところがその運動の中心であり、バイロンも支援していたカルボナリ党の活動は1821年には既に頓座していた。バイロンの楽園の希求は具体的な政治問題と絡んでいたのであった。確かに『ダンテの予言』を通して、彼はメシアの出現とイタリア解放を願っている。フローレンスを追われたダンテの故郷への怨恨の念をこの作品から捨象すれば、底にはバイロンの千年王国への衝動が息づいていたのである。その想像上のレベルでの千年王国への願望は、現実のイタリア解放の停滞を目の前にして萎縮していかざるを得なかったのだ。逆に言えば、この現実のレベルとの関係こそがバイロンの楽園願望の道行きを決定していったと考えられるのではないか。

IV

バイロンにおける崇高の黙示録的諸相は、形式として18世紀崇高美学のそれに範を取っている。18世紀から19世紀初頭にかけてイギリスでは千年王国の文学や予言活動が徐々に流行し、時にはそれはフランスでのその傾向を越えるほど激しいものとなっていた。⁽²⁸⁾ そうした運動は例えば千年王国実現を綴った

John Pomfretの“Dies Novissima: or the Last Epiphany” (1702) や「黙示録」での神の怒りの描写のIsaac Wattsの“The God of Thunder”と“The Day of Judgment” (1706) やあのAlexander Popeの救世主願望の詩“Messiah: A Sacred Eclogue” (1712) にその表現を見るのである。しかしそれらの文学はいかにも「黙示録」の展開を忠実に踏襲し、形式に重きを置く、想像性を欠くものでしかなかった。例えばポンフレットの「最後の審判の日」は神によって魂を天高く持ち上げられた人間が、自らの目撃した地上の変化を語るという内容をもつ。ナラティブの型に従ってアンチ・キリスト⁽²⁹⁾の没落と天使たちの降下が告げられ、“From its long sleep all human race shall rise, / And see the morn and Judge advancing in the skies” (Ⅷ. 336)⁽³⁰⁾と神の裁きの現場へと話の筋が展開するだけである。またワッツやポープの場合もほとんど大差はなく、形式的な想像力しか発揮されていない。バイロンも同じく最後の瞬間へと時を圧縮し、偉大な天に昇る卑賤な魂を導入する。しかし、そこには後で纏めるように重大な質的な違いが含まれているのである。

社会面での最も顕著な黙示録的活動はJoanna Southcottと彼女の弟子Richard Brothersによる千年王国論の布教であろう。両者共に民衆レベルで終末論的幻想⁽³¹⁾を燃え上がらせたのであった。ところが一時的に大流行となった彼らの運動は次第に下火になり、最後は哀れにも、前者は新メシアのSoilohを産み損ねて病死し、後者は国家転覆の企図の廉でNewgateに収容されたのであった。⁽³²⁾ところで、バイロンはこのような宗教家たち一般に対しては極めて批判的な態度をとっていた。例えば1811年9月13日付の友人Francis Hodgsonに宛てた手紙の中で彼はブラザーズがただの異端であることを認めた上で“Let us make the most of life, and leave dreams to Emanuel Swedenborg” (Ⅱ. 98)⁽³³⁾と述べ、神秘思想それ自身を退けているのである。逆に言えば彼の千年王国思想は常に社会という現実と繋がっていて、その現実性の故に彼は過度に想像的かつ超越的な楽園の復興を望まないのである。

このようにバイロンの黙示録的崇高では、現実意識が常に指導原理になっているのである。18世紀的な崇高意識が文字どおり「黙示録」の筋書きと結び付き、千年王国を招来するのに対して、バイロンにおいては決して千年王国が成

就することはない。これが両者の大きな違いである。18世紀の千年王国への渴望がフランス革命の洗礼を受け、ロマン派の想像性を深めた革命思想に至る動き⁽³⁴⁾とは対照的に、バイロンは内面の世界における楽園の探求には懐疑的であったようだ。もちろん彼はそれぞれの作品の主人公の内面に入り込んで自らの楽園願望を開陳するという点で、前世紀の黙示録観よりも一步踏み込んだ立場にある。ではあるが、もはや彼は文学の世界に千年王国を実現しようとはせず、現実の世界にそれを求めたのではなからうか。1817年2月28日付の Thomas Moore に宛てた手紙の中で文学とは無であり、かつ自分の天職ではなく、もし後残り10年長生きできるならば“I will do something or other” (V. 177) と言っているほどの彼である。それならばバイロンの千年王国の追求は一体どこに現れているのであろうか。

V

バイロンの黙示録的崇高は18世紀の宗教的崇高が認めた天上の神の領域を地上において実現しようとする千年王国主義の要素を秘めていた。それは彼自身が静かな天の楽園に憧れるユートピストから地上の楽園の建設者になろうとするミレナリアンへと変貌する瞬間だと言ってもよい。だが、楽園はどの作品を見ても復興されてはいないのだ。むしろ、彼の楽園建設の衝動は文学作品の枠を越えて、現実の土地ギリシアへと向かうように思われるのである。

バイロンが終生愛し、詩の中でも *Childe Harold's Pilgrimage* (1812-18) で “Fair Greece! sad relic of departed Worth! / Immortal, though no more; though fallen, great!” (II. lxxiii. 1-2) とその偉大さを称えてから、*Don Juan* (1819-24) では Juan と Haidée の愛の舞台としてその美を歌った国、ギリシアは黄金の過去を背負いながらも、現在はトルコの支配下に呻吟しなければならない、崩れかけた地上の楽園であった。そうしてみれば、バイロンは墮落したギリシアに理想境としての千年王国の空間を重ねて見ていたことになるのではないか。

忘れてはならないのは、バイロンが極めて真摯な態度でギリシア遠征に臨ん

でいることである。よく言われるように、彼のギリシア出発はヴェニス時代の自堕落な生活と内面の理想とのギャップを埋め合わせるための自己治療的側面をもつかもしれない。⁽³⁵⁾しかし、それは余りにも短絡的な論理構成でしかない。バイロンの最後の旅はむしろ極めて自然な形で彼に訪れた一つの結論であったように思われる。例えば彼が二度目の大陸旅行中に親交を深めた Blesington 夫人は、1823年の遠征直前の彼を “Byron seems quite decided on going to Greece; yet he talks of this project as if it were more a duty than a pleasure” (358)⁽³⁶⁾ の状態にあったと伝えている。また彼の最後の愛人である Teresa Guiccioli は遠征前の彼の “I [Byron] wish with all my heart that Greece should be free—and would like to co-operate, if it is in my power” (363)⁽³⁷⁾ という言葉を綴っているのである。バイロンにとってギリシア遠征は是非ともやらねばならない当然の企図であったのだ。彼の詩作品における黙示録的崇高の視点から眺めると、ギリシア解放は楽園願望の至るべき当然の結論であったのである。

私にはバイロンは救世主としてギリシアに赴いたように思われる。バイロンのギリシア遠征は思想上、彼自身もっていたヘレニズム的傾向と千年王国思想の発展の交点で生じた現象であったと思われる。ギリシアの救世主になろうとして倒れた詩人は、楽園を求めて死んだサーダナパラスとそれを実現しようとして殺害されたファリエロの延長線上にある死に方をしたのである。そして黙示録的崇高はより劇的な形で千年王国思想を提示するための、言わば起爆剤的役割を果たし、彼の楽園願望を刺激し続けていたと思われるのである。

注

*本稿は日本英文学会中部地方支部第41回大会（1989年10月7日、静岡県立大学）で口頭発表したものをもとにして補訂を施したものである。

- (1) 千年王国論の基本的解説は Norman Cohn, *The Pursuit of the Millennium* (Fairlawn, N. J.: Essential Books, 1957); Ernest Lee Tuveson, *Millennium and Utopia: A Study in the Background of the Idea of Progress* (New York: Harper & Row, 1964); Ralph H.

- Blodgett, *Millennium: When, and Where?* (Boise, Id.: Pacific P, 1981); Theodore Olson, *Millennialism, Utopianism, and Progress* (Toronto: U of Toronto P, 1982); Loraine Boettner, *The Millennium* (Phillipsburg, N. J.: Presbyterian and Reformed Publishing, 1984); さらにアンリ・フォション著／神沢栄三訳、『至福千年』(東京: みすず書房、1971) 参照。
- (2) この詳細はRev. 20: 1-15参照。
- (3) この件は Walter John Hipple, Jr., *The Beautiful, The Sublime, and The Picturesque in Eighteenth-Century British Aesthetic Theory* (Carbondale: Southern Illinois UP, 1957) 及び Samuel H. Monk, *The Sublime: A Study of Critical Theories in XVIII-Century England* (Michigan: U of Michigan P, 1960) 参照。
- (4) 実際に社会をラディカルに変革していこうとする千年王国主義者をミレナリアンと呼ぶ。この定義については J. F. C. Harrison, *The Second Coming: Popular Millenarianism 1780-1850* (New Brunswick, N.J.: Rutgers UP, 1979) 1-38参照。
- (5) この件は Edmund Burke, *A Philosophical Enquiry into the Origin of our Ideas of the Sublime and Beautiful*, ed. James T. Boulton (Notre Dame, Ind.: U of Notre Dame P, 1958) 57参照。
- (6) 崇高と宗教の繋がりには David B. Morris, *The Religious Sublime: Christian Poetry and Critical Tradition in 18th-Century England* (Lexington: UP of Kentucky, 1972) 参照。
- (7) 女性的原理への退行がユートピストの心理であることは David Bleich, *Utopia: The Psychology of a Cultural Fantasy* (Ann Arbor: UMI, 1970) 2-3参照。
- (8) バイロンの詩からの引用は *The Works of Lord Byron: Poetry*, 7 vols., ed., Ernest Hartley Coleridge (London: John Murray, 1904-5) に拠る。
- (9) バイロンの詩における黄金時代のイメージは Warren Stevenson, *The Myth of the Golden Age in English Romantic Poetry* (Salzburg: Universität Salzburg, 1981) 56-71 参照。
- (10) 楽園のトポスの歴史的進展は Mario A. Jacoby, *Longing for Paradise: Psychological Perspective on an Archetype*, tr, Myron B. Gubitz (Boston: Sigo P, 1985) 185-87 及び Bleich 1-25参照。
- (11) テキストは *The Mysteries of Udolpho*, ed. Bonamy Dobrée (Oxford: Oxford UP, 1980)

- に拠る。
- (12) テキストは *The Italian*, ed. Frederick Garber (Oxford: Oxford UP, 1981) に拠る。
- (13) バイロンの詩には現実的墮落と超越的始源との構造的対立が見られる。この件は Leslie Brisman, "Troubled Stream from a Pure Source" in *George Gordon, Lord Byron*, ed. Harold Bloom (New York: Chelsea House, 1986) 75-99参照。
- (14) 崇高と大洪水のイメージの関係は George P. Landow, *Images of Crisis: Literary Iconology, 1750 to the Present* (Boston: RKP, 1982) 134-44参照。
- (15) これは Cosmic Toryism として形容される思想である。この件は Basil Willey, *The Eighteenth Century Background: Studies on the Idea of Nature in the Thought of the Period* (London: Chatto & Windus, 1957) 43-56参照。
- (16) テキストは *Characteristics of Men, Manners, Opinions, Times, etc.*, 2 vols., ed. John M. Robertson (Gloucester, Mass.: Peter Smith, 1963) に拠る。
- (17) テキストは *The Critical Works of John Dennis*, 2 vols., ed. Edward Niles Hooker (Baltimore: Johns Hopkins UP, 1967) に拠る。
- (18) テキストは *The Spectator*, 4 vols., ed. Gregory Smith (London: Dent, 1907) に拠る。
- (19) この件は Edward E. Bostetter, "Byron and the Politics of Paradise," *PMLA* 75 (1960): 571-76及び E. D. Hirsch, Jr., "Byron and the Terrestrial Paradise" in *From Sensibility to Romanticism: Essays Presented to Frederick A. Pottle*, ed. Frederick W. Hilles & Harold Bloom (New York: Oxford UP, 1965) 467-85参照。
- (20) ユートピアの語源的定義については Louis Marin, *Utopics: Spatial Play*, tr. Robert A. Vollrath (Atlantic Highlands, N. J.: Humanities, 1984) 85-98参照。またユートピアの歴史的考察や基本的性格は M. Kaufmann, *Utopias; or, Schemes of Social Improvement from Sir Thomas More to Karl Marx* (1879; Folcroft, Pa.: Folcroft, 1972); H. W. Donner, *Introduction to Utopia* (London: Sidgwick & Jackson, 1945); Joyce Oramel Hertzer, *The History of Utopian Thought* (New York: Cooper Square Publishers, 1965); Frank E. Manuel & Fritzie P. Manuel, *Utopian Thought in the Western World* (Oxford: Basil Blackwell, 1979) esp. 1-29; さらにジャン・セルヴィエ著／朝倉剛・篠田浩一郎訳、『ユートピアの歴史』(東京: 筑摩書房、1972) 参照。
- (21) バイロンの失われた楽園への固着性は Robert F. Gleckner, *Byron and the Ruins of Pa-*

- radise* (1967; Westport, Conn. : Greenwood P. 1980) 及びPeter J. Manning, *Byron and His Fiction* (Detroit: Wayne State UP, 1978) 146-59参照。
- (22) 不貞を告発された Angiolina は George IV の妻 Caroline と重ねて描かれている。両女王とも大衆の支持を得ており、作品中の貴族政治への批判は19世紀初頭のイギリスの政治体制のそれへと繋がっている。この件については David V. Erdman, "Byron and Revolt in England," *Science and Society* (1947): 234-48参照。
- (23) これがバイロン自身の革命思想の後進性に繋がることは David V. Erdman, "Lord Byron and the Genteel Reformers," *PMLA* 56 (1941): 1065-94参照。
- (24) 平等社会の建設が千年王国の人間の願望であることは Charles J. Erasmus, *In Search of the Common Good: Utopian Experiments Past and Future* (New York: Free P, 1977) 113-66参照。
- (25) 千年王国論と社会変革の繋がりは J. C. Davis, "The History of Utopia: The Chronology of Nowhere" in *Utopias*, ed. Peter Alexander & Roger Gill (La Salle, Ill. : Open Court, 1984) 1-117参照。
- (26) 千年王国と救世主思想については Richard H. Popkin, "Introduction" in *Millenarianism and Messianism in English Literature and Thought 1650-1800*, ed. R. H. Popkin (Leiden & New York: E. J. Brill, 1988) 1-11参照。
- (27) テキストは *Medwin's Conversations of Lord Byron*, ed. Ernest J. Lovell, Jr. (Princeton: Princeton UP, 1966) に拠る。
- (28) この件は Clarke Garrett, *Respectable Folly: Millenarians and the French Revolution in France and England* (Baltimore & London: Johns Hopkins UP, 1975) 145-78参照。また、主に芸術面での黙示録的崇高の展開は Morton D. Paley, *The Apocalyptic Sublime* (New Haven & London: Yale UP, 1986) 参照。
- (29) この件は Christopher Hill, *Antichrist in Seventeenth-Century England* (London: Oxford UP, 1971) 参照。
- (30) テキストは *The Works of the English Poets*, 21vols., ed. Alexander Chalmers (New York: Greenwood P, 1969) に拠る。
- (31) この件は Bernard Capp, "Communication: The Millennium and Eschatology in England," *Past & Present* 57 (1972): 156-62及び大木英夫、『終末論』(東京: 紀伊國屋

書店、1979) 参照。

- (32) Southcott-Brothers のような18世紀後半から19世紀にかけての千年王国運動の分析は W. H. G. Armytage, *Heavens Below: Utopian Experiments in England 1560-1960* (London: RKP, 1961) 58-73; J. F. C. Harrison, "Millennium and Utopia" in *Utopias*, ed. Alexander & Gill 61-66参照。
- (33) バイロンの手紙の引用は *Byron's Letters and Journals*, 12vols., ed. Leslie A. Marchand (London: John Murray, 1973-82) に拠る。バイロンが予言者を否定した、その他の詳細な例は、同書簡集のIV: 164 & 167参照。
- (34) ロマン派やバイロンにおけるフランス革命の内面化については Albert Elmer Hancock, *The French Revolution and the English Poets: A Study in Historical Criticism* (New York: Henry Holt, 1899) 参照。
- (35) この件は Harold Nicolson, *Byron: The Last Journey, April 1823-April 1824* (London: Constable, 1924) 参照。
- (36) テキストは *His Very Self and Voice: Collected Conversations of Lord Byron*, ed. Ernest J. Lovell, Jr. (1954; New York, Octagon Books, 1980) に拠る。
- (37) テキストは *The Last Attachment: The Story of Byron and Teresa Guiccioli as Told in Their Unpublished Letters and Other Family Papers*, ed. Iris Origo (London: Jonathan Cape & John Murray, 1949) に拠る。